

大風呂敷をひろげない 老親介護

太田差恵子

(おた・さえこ)
1960年京都市生まれ。
介護・暮らしジャーナリスト、NPO法人バオッコ理事長。AFP（日本ファイナンシャル・プランナーズ協会会員）。遠距離介護や老親介護をテーマに執筆や講演活動を行う。著書に『老親介護とお金』（アスキー新書）など。

サ ザエさん一家の年齢をこ
存じだろうか。

フジテレビのウェブサイトに
よると、サザエさんは二四歳。
父親の波平は五四歳。フネは五
〇とウン歳らしい。

私はこれを知ったとき、いさ
さか驚いた。

確かに波平は会社勤めをして
はいるが、「おじいちゃん」像
で描かれている。フネにしても
和服のせいもあるだろうが、ど
う見ても「おばあちゃん」。私
自身あとウン年で同い年かと思
うと、カンベンしてほしい気持
ちになる。あんなに老けてはい
ないゾ、と。

サザエさんが誕生して六〇年
以上が経つらしい。この間、日
本のお年寄り像が大きく変化し
てきた。

実際、五〇年ほど前の日本の
平均寿命は男性六三歳、女性六

七歳。後期高齢者どころか、前
期高齢者になるかどうかの頃で
ある。

プラスされた寿命は二〇年。
この二〇年をどう生きるか、ど
う支えるかが問題になっている。
私は子の視点から「どう支え
るか」の取材を継続している。

で、感じることは……。みん
な支えようと懸命だということ。
「みんな」というのは語弊があ
るかもしれない。放つたらかし
にしている子や、親の財産を食
いつぶしている子がいることも
事実。が、多くの子世代は親に
笑顔の老後を過ごしてもらいた
いと願っているといってもいい
のではないだろうか。

が、気持ちはあるけれどもなん
でもかんでもはできない。自分
の生活もある。介護をしたくても、
仕事を休めない。仕事を辞めた
ら、食べていけない。子の教育

費や住宅ローンにも追われてい
る。そんな現実のなかで、「支
え方」はさまざま。付きっきり
になれるような場合ばかりでは
なく、自身の生活とバランスを
とらなければならぬ。うまく
バランスがとれず、介護者であ
る子世代までもが心身の調子を
崩し病院通いすることもある。

老親虐待や、最悪の場合は心中
や介護殺人に至ってしまうケ
スさえある。

プラスされた二〇年を、サザ
エさん一家のようにのびやかな
笑顔で過ごすためにはどうすれ
ばいいのだろう。

冷血だと非難されること覚悟
で言おう。

大風呂敷をひろげないこと。
老親を大切にすることは大事
なことだろう。だが、自分たち
も生きている。自分たちが笑顔
でいられなければ、親に笑顔を

与えることなどできない。

感情では「できることは何で
もしてあげたい」と思っても、
実際には「何でもする」なんて
ことは無理。経済的なことを考
えても、自分たちのことで精一
杯であるなら、親を支援するこ
とは難しい。介護費用は本人手
当が基本だと思う。

一時の感情で、たやすく「ま
かせて」などと言わない。それ
よりは、親の貯えや月々の収入
を知り、介護にいくらまでなら
かけられるかを知る。親はどう
いう生活を望んでいるかを話し
合い、情報を集め、介護の形を
プランニングする。

老親介護に「美談」はつきも
の。できた息子さん、娘さん。
が、精神的にも経済的にもゆと
りのあるケースを除けば、美談
の影には涙がこぼれていること
が多いのではないだろうか。